予告

FUTURE EVENT 01 第43回名古屋芸術大学 卒業制作展

2016年3月1日［火］－6日［日］
愛知県美術館ギャラリー［愛知芸術文化センター8階］
10:00－18:00（金曜は20:00、最終日は17:00まで）
【美術学部】美術学科（日本画・洋画・美術文化）
【デザイン学部】デザイン学科

名古屋市民ギャラリー矢田
9:30－19:00（最終日は17:00まで）
【美術学部】美術学科(彫塑・ガラス・陶芸・アートクリエイター・版画)
【デザイン学部】デザイン学科

名古屋芸術大学西キャンパス［アート&デザインセンター］
10:00－18:00
【デザイン学部】デザイン学科

FUTURE EVENT 02 第43回名古屋芸術大学 卒業制作展記念講演会 高橋源一郎「芸術家失格」

2016年3月5日［土］14:00－16:00
アートスペースA（愛知芸術文化センター12階）
入場無料:要申込 ※申込は終了しました

卒業制作展会期中には、展覧会を記念した講演会を開催します。本年は小説家の高橋源一郎さんをお招きします。2011年４月から朝日新聞に連載された「論壇時評」では、震災と原発、若者の就活、ヘイトスピーチ、特定秘密保護法、従軍慰安婦、表現の自由など、さまざまな問題をしなやかに論じる語り口は、大きな注目を集めました。「芸術家失格」と題して、ご自身の青春と芸術への思考を講演いただきます。

チラシデザイン：
則武輝彦（TENPO）

2016 04－09 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15－18:00（最終日は17:00まで）日曜・祝日休館　**入場無料** どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

4/ 1 金→	4/13 水	2015年度 デザイン学部レヴュー選抜展
5/ 6 金→	5/11 水	美術学部コース展（仮称）
5/13 金→	5/18 水	『Peace nine 2016』展
5/13 金→	5/18 水	アートクリエイターコース・コレクション展
5/20 金→	5/25 水	名古屋芸術大学OB・OG展2016
5/27 金→	6/ 1 水	PLAYGROND イラストレーションコース3・4年生作品展
6/ 3 金→	6/ 8 水	From Denmark 2016 展
6/10 金→	6/15 水	名古屋芸術大学教員展
6/17 金→	6/22 水	プレソツ展
6/24 金→	6/29 水	名古屋芸術大学大学院 洋画制作2016
7/ 1 金→	7/ 6 水	スペースデザインコース展「くうねるところにすむところ」展
7/ 1 金→	7/ 6 水	大学院コミュニケーションアート&デザイン演習発表展
7/ 8 金→	7/13 水	2016年度 前期留学生作品展
7/15 金→	7/27 水	2016年度アート&デザインセンター企画展 **版の方法論；50×50 展**
7/29 金→	8/10 水	素材展
9/23 金→	9/28 水	第29回バスケタリー展/ 佃真弓 カゴによる世界との交流/川瀬三重子のさざめく形
9/30 金→	10/ 5 水	彫刻展（アートクリエイターコース-彫刻クラス）

編集後記

「デザインのできる○○」「歌って踊れる○○」というのは、実はどの職業にも当てはまるように思います。デザインができるっていうのは単にグラフィックが描けることじゃなく「踊れる」もその上手下手じゃなくて、その「場」に何が必要かを読み取る力や相手とのコミュニケーション能力だったりする訳です。それは要するに生き抜く力なのかなと。

十数年前に司書資格を取った頃は夢物語だった開放型・滞在型の図書館を目の前にして、夢って十年位経つと叶うんだな、と幸せな取材でした。私も今からムーンウォークの練習を・・・。

惣城友美（アート＆デザインセンター）

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL［0568］24-0325　FAX［0568］24-2897

B!e Vol.44
発行日　2016年3月1日
編集　髙橋綾子（美術学部美術文化コース）／惣城友美（アート＆デザインセンター）　写真撮影 ハマベユミ（特集のみ）
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2016　Printed in Japan ©　Art & Design Center, Nagoya University of Arts

デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
B!E NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS　2016.Vol.44

みんなの図書館

Library for"you"

理想の公共図書館ってなんだろう。近年、CCC（カルチュア・コンビニエンス・クラブ）とTRC（図書館流通センター）の指定管理者制度による運営騒動が注目されるなど、図書館はその構造の転換期を迎えている。

昨年7月18日にオープンした「みんなの森　ぎふメディアコスモス」は"知の拠点"（市立中央図書館）、"絆の拠点"（市民活動交流センターなど）"文化の拠点"（みんなのホール・みんなのギャラリー）という3つの拠点を持つ複合施設で、伊東豊雄の設計も話題を呼んだ。その目玉となる岐阜市立中央図書館は、開放的でありながらどこか落ち着く空間で、あらゆる場所にワクワクする仕掛けが点在している。その仕掛人、市立中央図書館館長の吉成信夫さんにお話を伺いながら「みんなの」図書館について考えてみたい。

これからの図書館に必要なのは「デザインのできる司書」それから「歌って踊れる司書」。

先に結論を言っちゃうと、今一番必要としているのは、本が好きなだけじゃなくて「デザインのできる司書」。もうこれは必須。もう１人は「歌って踊れる司書」。要するに子どもとコミュニケートできる司書が必要。本を通して人とつながったり、街とつながったり、そういう思考ができる人が欲しい。

今までは閉鎖的でいわゆる本の貸借に特化して、それをどれだけ効率的に回せるかが司書に求められてきた。それは今も変わらないけれど、それだけじゃない。本の貸借だけではない、その場にいることの「何か」だよね。何かが起きる場所っていうのは本当に偶然で、その偶然を起こす「場」としての図書館を考えなくちゃいけない。「場」のデザインなんです。

「これは僕がやらなきゃいけないかな」という気がした。

館長の公募は、たまたまFacebookで風の便りに流れてきたんです。公募なんて今までの人生の中で一度もなかったのに、なぜか「これは僕がやらなきゃいかんのかな」と。一つは設計した伊東豊雄さんが被災地で行っていた「みんなの家」の活動を知っていたという事。僕も被災地支援をずっとやっていましたから。そして彼のこの図書館の建築の考え方。「空気が流れるような開放的な空間を作りたい」というのは、僕が考えていた事と一緒だった。公共の場所をそういう開放的な場所に変えていくことが僕の大きなテーマですから。

岐阜市立図書館館長 吉成信夫 氏

「公園」というコンセプト

ここの紹介をする時に、僕は「公園」というコンセプトで話します。公園っていうのはお互いさまなんです。カップルに子ども、老人もいる。みんながお互いに見えている。ということは、そこで人は喋るじゃないですか。喋らない公園はありえない。カオスのように混ざり合いながら繋がったり、離れたり、という事が起きる場所。「うるさい」という声も従来の利用者からは当然出て来るけど、その中でどうやってせめぎあいながら、岐阜市民の方々がお互いの場所を決めていってもらえるか、ということの実験です。

開館から約半年、入場者も60万人になりました。何が変わったって、ベビーカーを引いて胸張って入って来る若いお母さんが激増したんですよ。みんな胸張って入って来ているように僕には見えるんです。

みんなの図書館
Library for "you"

「人生の中で一冊でもいいんだよ。会える事が大事」

選書については、市の図書館だから郷土の専門性は持たなければいけないけれど、社会科学や人文科学といったものはここじゃなくていい。アカデミックな知も大事だけど、知性って何なのかって考えた時に、ここで必要なのは生活の中で育まれてきた知性だったり文化です。ここは街の中の図書館だから、本もそこに特化した選び方も入れていきたい。

小学校に配布した読書ノートは「本のお宝帳」という名前。人生の中で、一冊でもいいんだよ。会える事が大事だから。沢山読む事が良いと言うわけでもない。そして、人に薦められて読む事もあっていいけれど、できれば自分で掴んで欲しい。僕も「夏の100選」なんて絶対読みたくない子どもだったからね(笑)。

今までのレファレンスっていうと、押し付けないことが基本でした。でも僕はもしその本が面白くなかったら面白くないってはっきり言います。「僕はこう考えるけど、あなたはどう?」っていうのが入らないと、まずコミュニケーションが始まらない。僕はそこを大事にしたい。

「人」のアーカイブを作りたい

まだこれからの話だけど、郷土の情報をやっぱり僕らなりのやり方で出して行きたいと思っています。この間、お店のアンケートを取ったんです。僕らはお店をそのまま紹介はできないけれど、市民が薦めたお店を紹介することはできる。図書館でお店を紹介したっていいじゃない。逆にそこに行ってもらいたい。「どういう人か」って分かったら、行きたくなるでしょ。どういう人か、どういう本を読んでる人かっていう範疇まで僕らは紹介できる。そういうことを多発させたい。これは図書館なのか?って言われたら、その中間なのかな。それで僕は良いと思う。出発点は本だけど、本とは関係ないように見えても、今生きている最前線の生活の中にある知恵や文化をアーカイブして行きたいんです。

インタビューの後で見学させて頂いたイベント「カンチョーとヒミツのおさんぽ」。前半は図書館の外で体ならし。ここでの「カンチョー」は口びけを付けている。

みんなの森 ぎふメディアコスモス
http://g-mediacosmos.jp

「分類法」の未来

(CCCとTRCによる指定管理者制度の騒動について)全てのノウハウや情報の蓄積は人の体の中にあるから、その「人」を離して全て指定管理にする事には疑問がある。ただ本を貸し出す、イベントをやるだけならそれでいいけど、そこに信頼感だったり感情的な質感、そういうものの近さみたいなものが、図書館には必要だと思っているから。でもじゃあCCCが全部悪いかというと、配列や配架の問題とか、本当に今までの分類方法でいいのか?っていうと僕はそう思っていないんですよね。図書分類法ってのは司書にとって憲法みたいなもんですから、変えるとなったら相当な準備をして触る必要がある。でもそこに利用者のニーズを考えて踏み込もうとしたことに関しては否定しない部分もあります。

「カンチョーとヒミツのおさんぽ」後半は『セロひきのゴーシュ』を参加者全員で即席劇に仕立て上げる。ものがたりの世界、ことばが体感として記憶に残る。写真はゴーシュの弾いたセロの音を聞いた猫がはねあがって回る場面。

「みんなの図書館」in MEIGEI

企画展示[戦争と美術・グラフィズム]

本学の図書館でも、利用者を増やす為の様々な試みが行われている。2014年11月から西キャンパス図書館で始まった『図書館NEWS』(季刊)は、月に一度東西の図書館のリーダーが集まるスタッフミーティングでスタッフからの提案で始まった。毎号、その時節に合わせたり教員から薦めることは少ないポーズ集など、学生の興味を引き出すテーマが特集されている。

東キャンパス図書館では収蔵の特性を生かし、AVコーナーに展示が展開されている。また、LPレコードを解説付きで楽しむレコードコンサートも定期的に開催され話題となっている。

また、昨年12月に西キャンパス図書館の中に展示スペースができた。これは長田謙一図書館長企画のもと、「デザイン史」の授業の一環として組まれたプロジェクトである。展示室の中には従軍記録画集や戦時期の美術誌・グラフ誌や、ナチス・ドイツとの関わりを示す書籍などが置かれ、手に取って見る事ができる。受講生は展示室にあるタスクカードの指示を読み、展示資料整理や壁面制作、あるいは展示から興味を持った問題にかかわる本を館内から探しだし、展示室内のカートに並べたり、ミニレポートを提出することで企画に参加する。来館者は展示を見ると共に、その書籍が動いていく様子など企画の進行を見ることにもなる。また展示を順に追って見ていくと、例えば雑誌『写真週報』に写る歌のタイトルの楽譜とLP盤のレコードが目の前の机に置いてあるなど、空間全体が様々なキーワードで繋がっている事に気づく。それはまるで何かの研究室を覗き見しているような感覚を来場者に与え、普通のギャラリーとは違った楽しみ方ができる空間になっている。「この企画は1月で終了するが、今後もこのスペースで企画を展開していきたい」と長田館長は語った。今後の動きに期待が寄せられる。

展示の解説をする長田館長

西キャンパス図書館のスタッフのみなさん。「図書館NEWS」は各スタッフが持ち回りで特集を担当する。

『図書館NEWS』と連動した特集展示コーナー。NEWSには大きく取り上げられなかった関連の書籍も展示されている。取材した1月の特集は「ブックデザイン」。2012年まで本学の特別客員教授に就任した祖父江慎先生デザインの書籍もまとめられている。

レポート

REPORT 01 メディアデザインの手法 L'atelier media design

レクチャー「メディアデザインの現在 Ghost Writer」
2015年11月3日[火]
名古屋芸術大学 西キャンパスB棟大講義室

メディアデザインワークショップ
2015年11月4日[水] ー 6日[金]
名古屋芸術大学 西キャンパス プレゼンルーム

ワークショップ作品発表
2015年11月7日[土]
名古屋大学 情報科学研究科棟 第1講義室

ワークショップ作品　展示風景

ダニエル・シボース 氏

2015年11月、デザイン学部特別客員教授としてスイスよりダニエル・シボース氏を招聘した。現在ジュネーヴ高等美術学校においてメディアデザインの教育に係わる一方、展覧会デザインの分野においてスイス国内外で活躍している。

今回本学で実施したワークショップのテーマは、スイスの旅行家・作家ニコラ・プーヴィエ(1929-1998)の体験を基にしている。街を行き交う人々を撮影することによって、想像上の物語を浮かび上がらせる彼の手法を手がかりに、現在の技術を使って再解釈することを目的とした。

ワークショップの参加者たちはまず、人が行き交う場所でじっくり時間をかけて観察してみることから始めた。普段意識しないで通り過ぎる風景の中から見えてくるものや、気づいたことをメモして集めていく。その後テーマや撮影方法を決定し、固定したカメラで録画されていく映像の中に予想されない「何か」が収まるのを待ち続ける。

撮影した映像をコンピュータで分析し、監視カメラのように人物を認識させてみると、看板、人の影、光の反射など意外なものまで人物として認識してしまうことの面白さが見えてくる。その中から興味深い画像を選択し、静止画として出力した。展示会場には参加者全員の画像をランダムに配置し、そこから見えてくる「作家が存在しない物語」を想像してみた。このワークショップのタイトルは「Ghost Writer」である。　**竹内　創　デザイン学部准教授**

REPORT 02 向井周太郎 特別講演会 「デザイン学を再考する」

2015年11月21日[土]
名古屋芸術大学西キャンパス B棟大講義室

向井周太郎 特別講演会　講演風景

デザイン科ではなくデザイン学科であること、デザインの「学」の名を冠しながら、これまでそれが意味することについて深く考えたことがあっただろうか。このことに対する答えを求めようとする時、耳を傾けるべき言説を長きにわたり発し続けてこられたのが、今回お招きした武蔵野美術大学名誉教授であり、日本のデザイン学研究の第一人者でもある向井周太郎氏である。

近視眼的で刹那的なまなざしによって生み出される志向や嗜好を嘆いてみたり、目前の課題に対し逃れ難き事情から(と勘違いして?)表層のみを取り繕い良しとしてしまうことに後味の悪さを感じたりすることはむしろ容易い。対して「専門のない専門としてのデザイン」がデザインの専門的特質であるとし、専門性の境を軽々と飛び越え、人類のこれまでのあらゆる知をたずね歩き、その驚異的なまなざしによって真なるものを見極め、紡ぎだされた向井氏の「生の哲学」としての「生成する生のデザイン学」は、デザイン領野はもとより、世界に対する救済の概念であり、希望の原理だ。

今回、向井氏には、その思考の方法論としての「生のコンステレーション(星座)」の披露から始まる、デザイン学の理念と形成のための七つの視点『「生」の全体性としての生活世界の形成』『近代デザインの真の意味とは―その課題の再考』『内発的発展としての近代化の環境形成』『自己再生的文明の形成とデザイン』『デザインを制作の根源から考える』『社会(ソーシャルデザイン)―オイコス(oikos)の思想と再建』『「生命知」ないし「生知」としての美意識・美学の形成とデザイン』について語っていただいた。

その講義に衰えはなかった。広大で深遠な思索の宇宙にひとり放り出された感覚の中で眩暈すら覚えた。学生時代も確かにこうだった。向井周太郎は永遠に私にとっての師であり、心地よい難題でもある。

萩原　周　デザイン学部教授

向井周太郎 氏

ART WORDS FROM THE ART WORLD

1982年1月20日、25歳の島氏。
この年から画廊巡りの旅が始まった。
新宿ヨドバシカメラにて。

愛知県美術館　館長
島　敦彦
Atsuhiko SHIMA

芸術一話 第20話 もぐりの学芸員

「島君、学芸員という楽な仕事があるらしい。それだったら、絵も描き続けられるよ」と助言してくれた大学の先輩の一言が、学芸員になったきっかけです、と言うと驚かれるかもしれません。学生時代にサークルで絵を描き、当時専攻していた金属工学に興味が持てなくなっていた私には、渡りに船。絵を描きながら学芸員の仕事もできる?そんな夢物語(実践している人もまれにいます)に憧れて、ともかく学芸員資格だけは取得し、1980年4月、私は富山県立美術館の準備室にもぐりこみました。もちろん現実がそんなに甘いものでないということは、後々いやというほど味わわされるのですが、その頃の学芸員に対する一般的な認識は、そのようなものでした。今や、美術館学芸員は狭き門。大学院で美学や美術史をきちんと修め、さらに留学経験のある優秀な人しか働くことができません。

富山県立近代美術館で約12年、その後大阪の国立国際美術館で23年勤務し、巡り巡って現在は、愛知県美術館に来ています。もともと特定の専門領域を極めたわけではないので、何でもやってきました。富山では理工系出身のせいか、「芸術と工学」展を任され、大阪時代には、「絵画の庭ーゼロ年代日本の地平から」や「工藤哲巳回顧展」を担当しました。現存の作家たちと仕事をすることが多かったので、展覧会を見て回ることにほとんどの時間を費やしてきました。そこで出会った人と作品が、今の私の仕事を形作っています。